



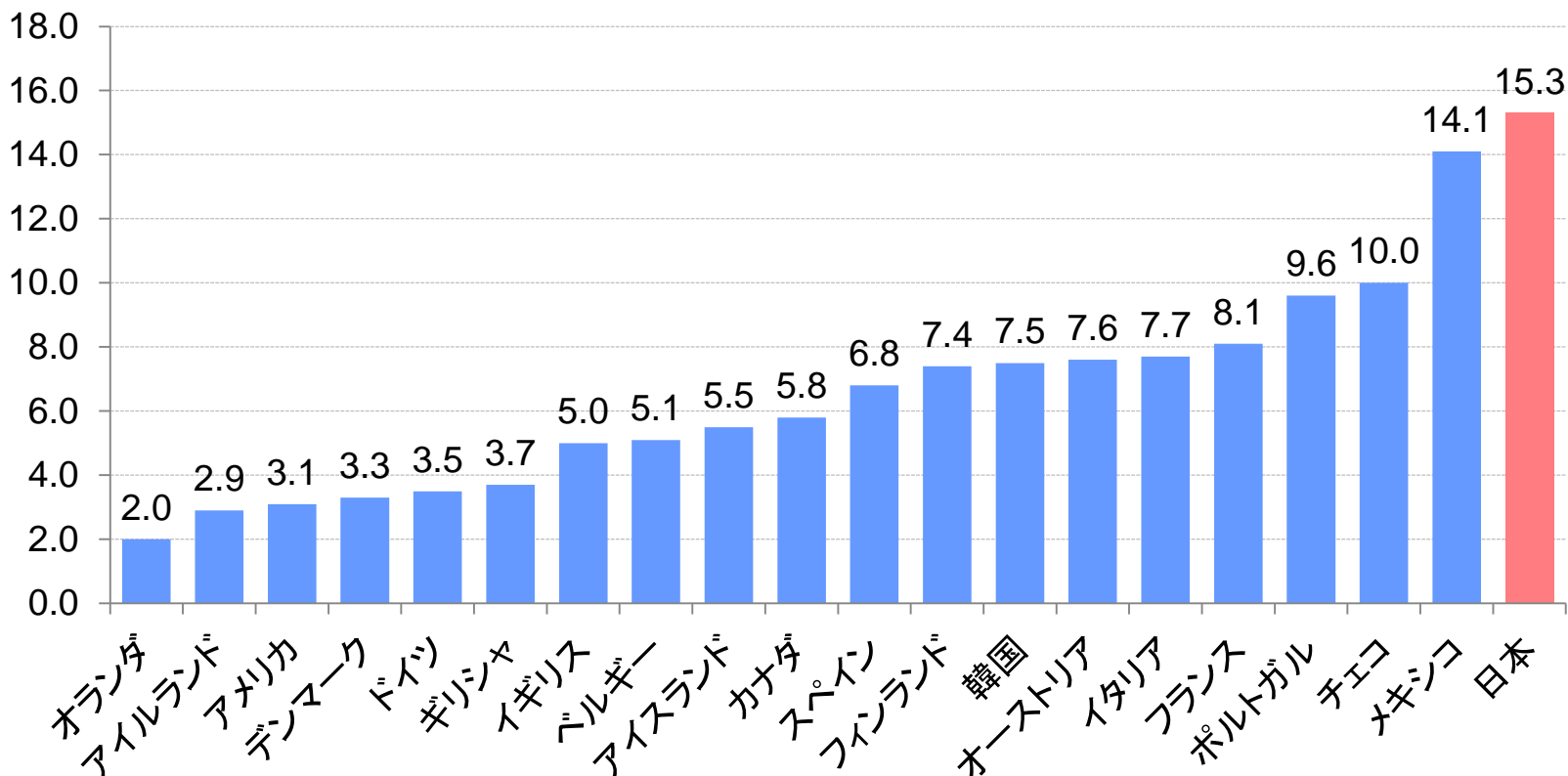
【2013-14年度 ジェロントロジー研究】
「長寿時代の孤立予防に関する総合研究
～孤立死3万人時代を迎えて～」
概要版

Gerontology
Gerontology

2014年12月
(株)ニッセイ基礎研究所
特別研究プロジェクトチーム

社会的孤立をめぐる最近の動向

■ OECD20カ国の中で、ダントツに高い日本の孤立度 (家族以外の人と交流のない人の割合)



(注) 友人、職場の同僚、その他社会団体の人々(協会、スポーツクラブ、カルチャークラブなど)との交流が、「全くない」あるいは「ほとんどない」と回答した人の割合(合計)

(資料) OECD, Society at a Glance: 2005 edition, 2005, p8.

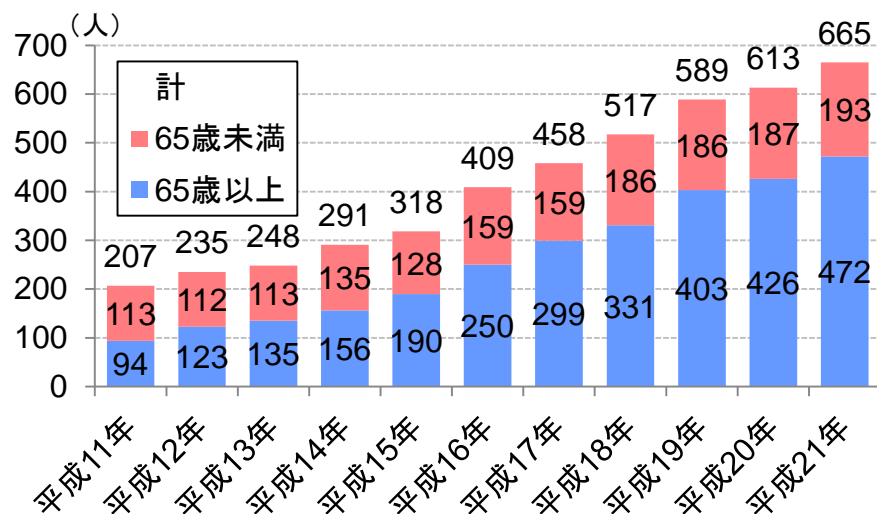
社会的孤立をめぐる最近の動向



- 孤立死は、10年間で3倍に増えている

- 孤立死は、現在3万人だが、さらに増加の懸念
(単身世帯の増加による)

■ 孤立死*が増加(UR都市機構データ)



※(独)都市再生機構が運営管理する賃貸住宅で、単身居住者が誰にも看取られることなく、賃貸住宅内で死亡した件数

■ 孤立死は年間約3万人(ニッセイ基礎研推計)

↓発見されるまでの日数		発生確率 (%)	全国推計 (人)
2日以上	全体	2.95	26,821
	男性	3.62	16,617
	女性	2.24	10,205
4日以上	全体	1.74	15,603
	男性	2.33	10,622
	女性	1.10	4,981

※発生確率は東京都23区における孤立死発生確率

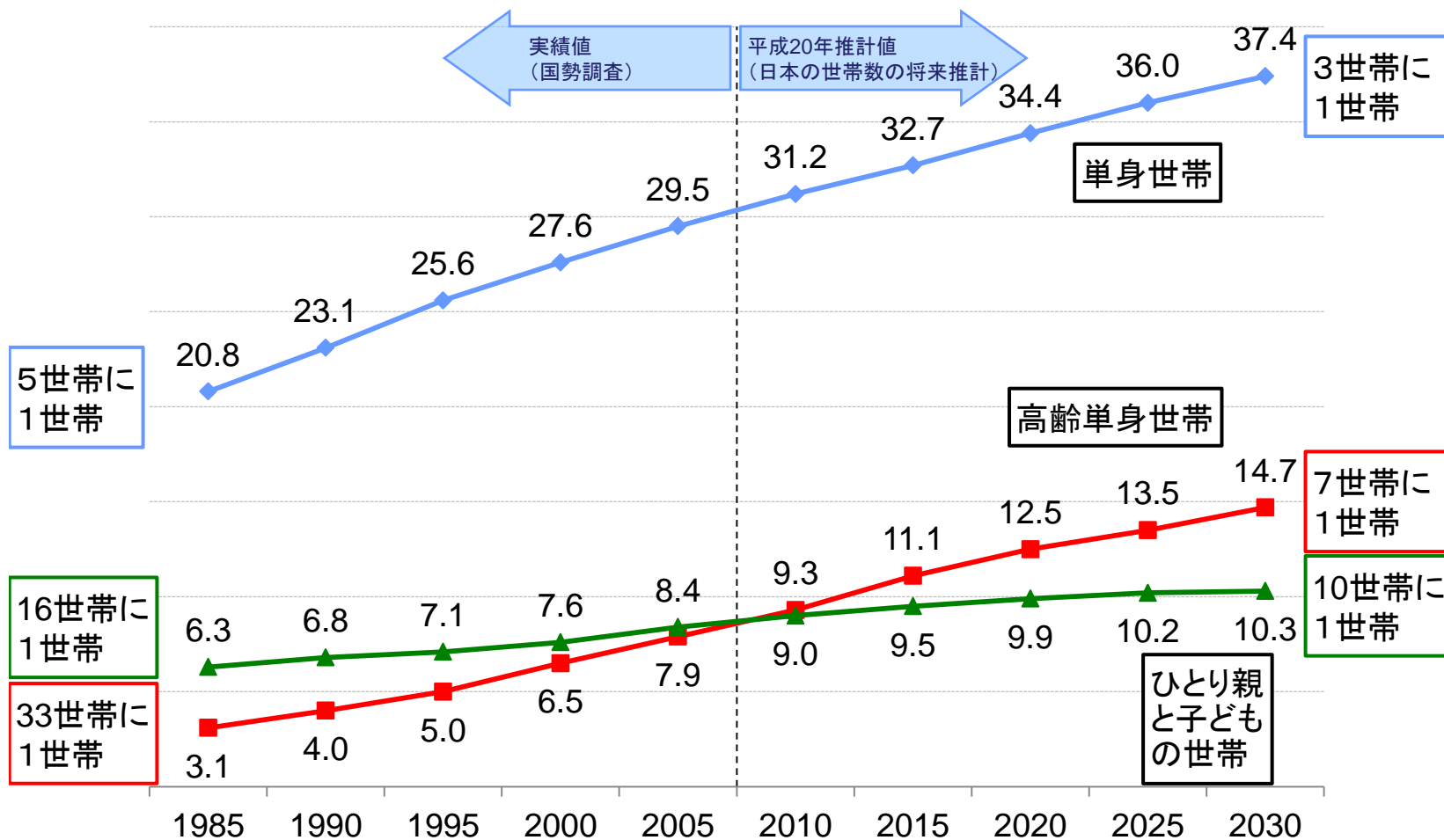
※全国推計は全国の65歳以上高齢者の孤立死数推計結果

資料:ニッセイ基礎研究所「セルフ・ネグレクトと孤立死に関する実態把握と地域支援のあり方に関する調査研究報告書(平成22年度厚生労働省老人保健健康増進等事業)」(2011年3月)

社会的孤立をめぐる最近の動向



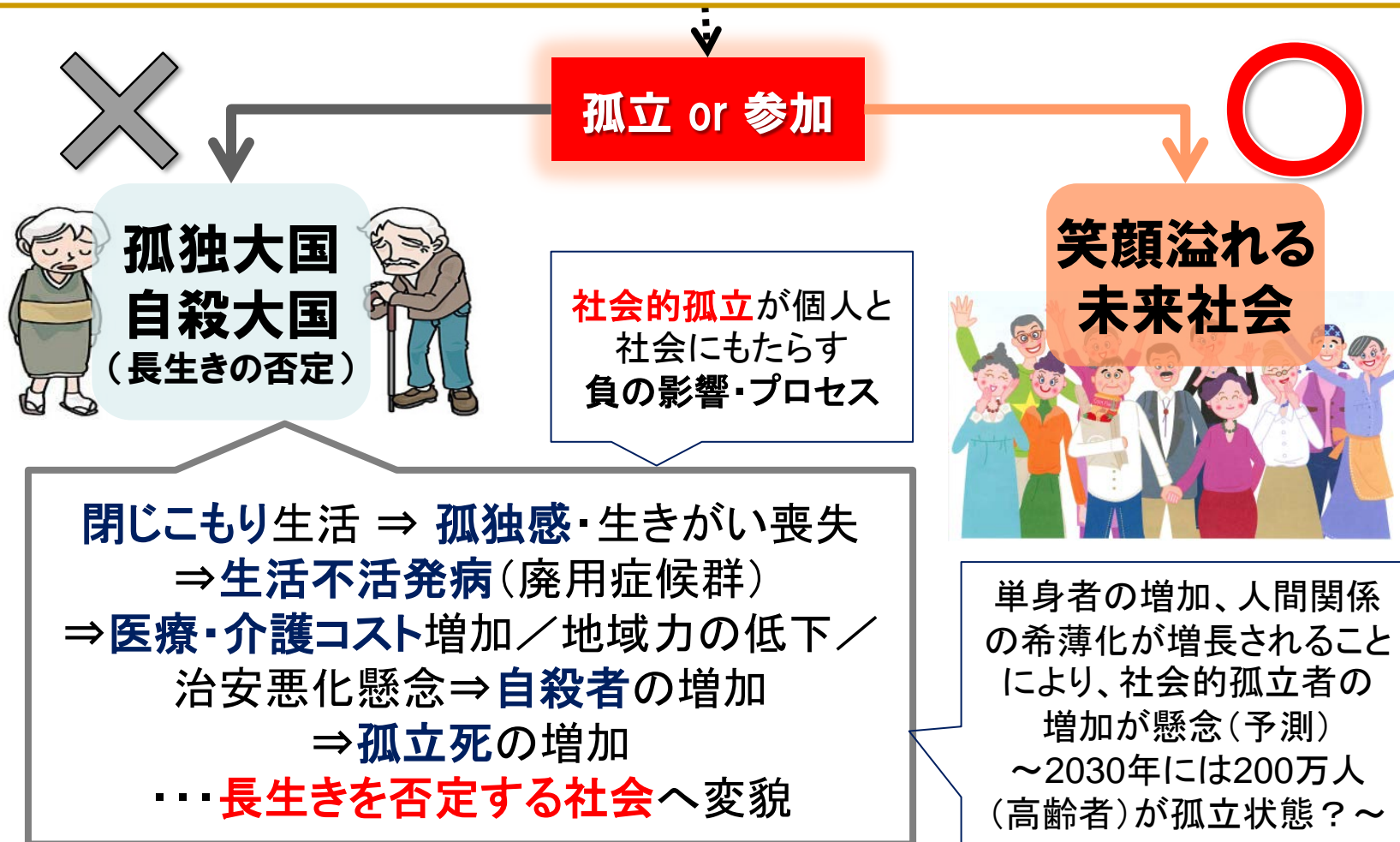
■ 2030年には3世帯に1世帯が単身世帯



(資料)総務省統計局「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計(全国推計)」(2008年3月推計)

《社会的孤立の問題性》

孤立者を無くせるか否かで**未来社会の様相**は180度異なる



I. 研究概要 ①研究目的

- 高齢化最先進国日本、高齢化諸課題は山積
- 社会・人間関係の変化⇒「**高齢期の社会的孤立**」問題顕在化
- 孤立者を包摂する取り組みは多いが、**「予防」に焦点を当てた取り組み及び研究成果は僅少**
- 安心で活力ある豊かな超高齢未来を築くため、高齢期に孤立者を産まない社会の実現を目指す
- 4つの世代(ゆとり/団塊Jr/団塊/75+)の意識や生活(コミュニケーション)の実態把握を行いながら、その『**予防策**』を追究
- 本研究は探索的な独創的研究(新規性・公共的価値は高い)



Ⅰ. 研究概要 ②先行研究レビュー

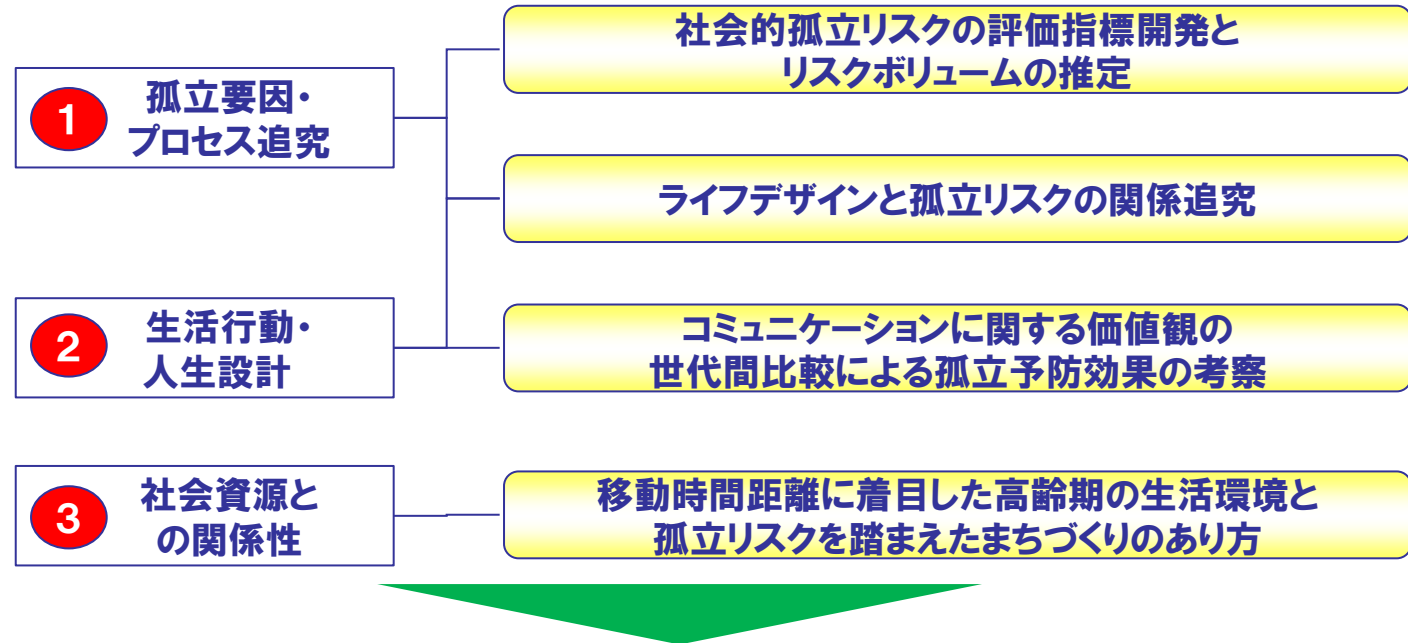
- 孤立高齢者の出現率：1割未満（共通見解）
- 孤立高齢者の特徴：男性、未婚・子なし、低所得、虚弱（不健康）
- 地域環境との関係：都市と農村、明確な結論に至っていない
- 社会的孤立は健康余命、自殺と関連
- 孤立に至る要因は複雑で重畳的

なぜ、血縁・社縁・
地縁・選択縁が途切
れてしまうのか
(内部検討の
積み重ね)

		個人			環境	
		健康要因	経済要因	行動要因	住まい要因	地域資源要因
		健康を害した	貧困に陥った	このような 行動をしている	このような 住まい方	このような 地域環境
		↓	↓	↓	↓	↓
関係性の 喪失	血縁	・家族と死別(いない) ・家族と仲が悪い ・親がICTを使えない	・家族の支援を受けられない	・夫、妻、子に依存している	・独り暮らし ・子供は遠方に住んでいる	
	社縁 (職縁)	・関係が希薄 ・退職後は疎遠	(・働く場がない)	・忙しすぎて時間的余裕がない		
	地縁	・近所に友人がいない ・地域の支援を拒む ・地域の支援を知らない ・地域の活動に参加してこなかった	・地域に働く場がない ・生活保護を受けられない	・出不精 ・家が快適、家好む ・独りが好き ・体力に自信がない	・集合住宅に共有スペースがない ・入居者の入れ替わりが激しい ・単身世帯、共働き世帯が多い ・近隣世帯と距離が離れている	・近くに行きたいところがない ・外出支援サービスがない
	選択縁	・参加組織がない ・他人と共有する趣味がない		・ICTリテラシーが低い ・SNSを利用しない ・ICTに依存している ・無趣味		
		↓	↓	↓	↓	↓
孤立する(可能性が高い)						

I. 研究概要 ③調査設計～分析アプローチ

<研究アプローチ・テーマ>



コミュニケーション量にもとづく「**孤立リスクレベル**」の設定 ※独自開発
⇒高齢期の**孤立リスク要因**を推定し、**孤立予防視点(策)**を明確にする

新規性

孤立「**予防**」
という着眼点

コミュニケーション量にもとづく
「**孤立リスクレベル**」
の設定と分析

孤立リスクレベルとの**多面的な検証**
4世代データの集積と比較分析

I. 研究概要 ④調査手法



(1)【定性的調査】フォーカス・グループ・インタビュー調査

①千葉県我孫子市 ②埼玉県春日部市

民生委員、地域見守り活動参加者等(計4グループ、27名)

(2)【定量的調査】WEBアンケート調査

・調査対象者(WEB調査会社のモニター:全国の男女、4世代)

・各世代の有効回答数

ゆとり世代(23-25歳) 1647名

団塊Jr世代(39-42歳) 1889名

団塊世代(65-67歳) 1862名

75+世代(75-79歳) 1105名 **計6503名**

・質問項目:計168問(小項目ベース)

II. 考察① 社会的孤立リスクの測定と評価指標の開発



■ 社会的孤立リスクの評価指標の測定

● コミュニケーション量の定義

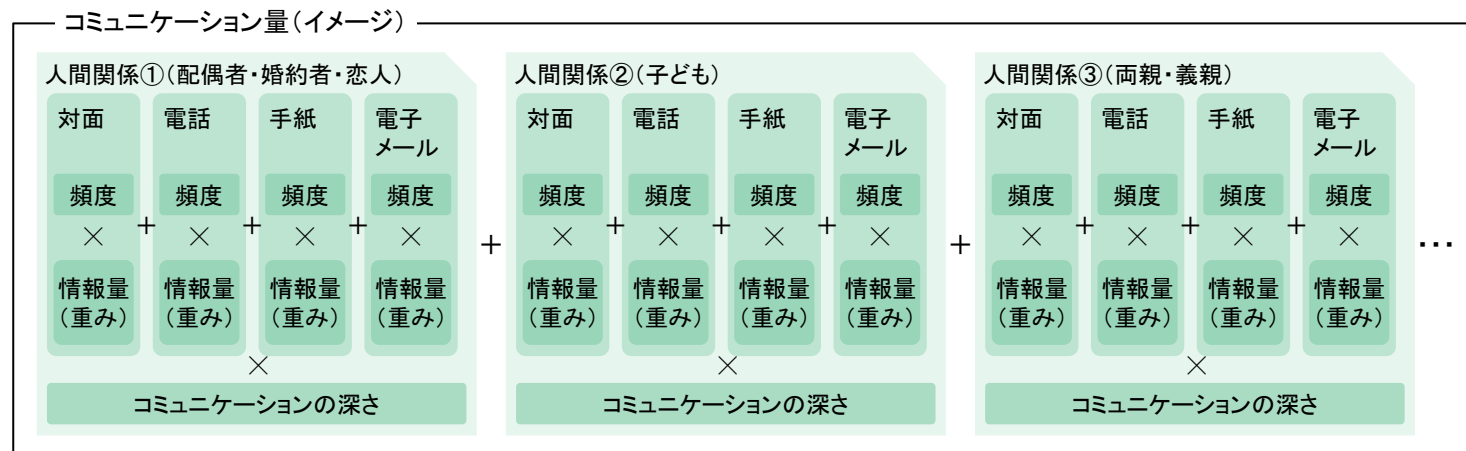
日ごろのコミュニケーションの総量は、個々の相手方との関係性(コミュニケーションの深さ)と、手段ごとの頻度の総和の積和で表すことができる

■ コミュニケーションの深さ

- ◆ 調査でたずねた10種類の人間関係ごとに、それぞれ、「個人的な悩みをうちあけたり、相談したりできる人数」を「日頃つきあいのある人数」で除し、人間関係の種類によるコミュニケーションの深さの差異を調整

■ コミュニケーションの頻度

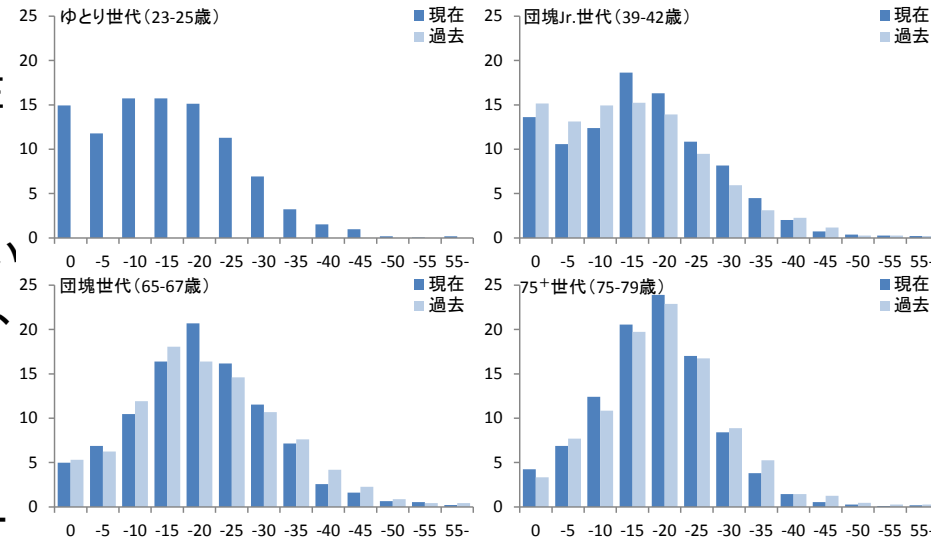
- ◆ 4つの手段ごとのコミュニケーションの頻度について、個々の手段ごとに異なる重みを付与



II. 考察① 社会的孤立リスクの測定

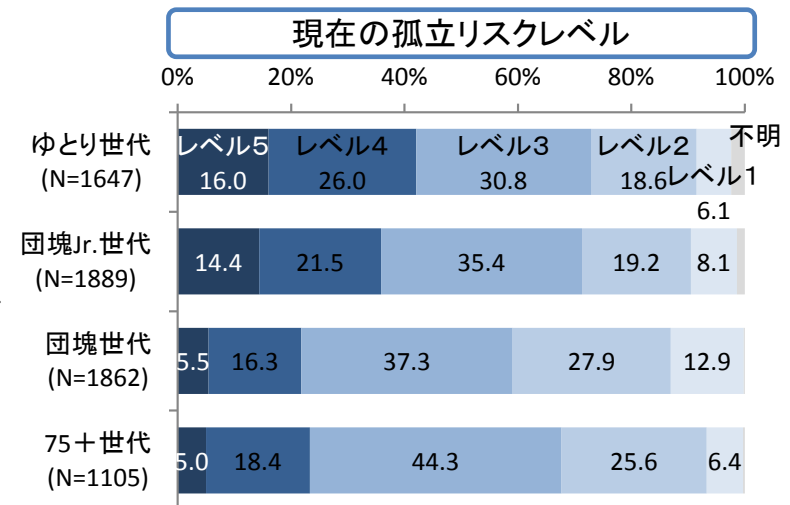
■ コミュニケーション量の分布

- 前頁の定義に従い、各世代の現在および過去のコミュニケーション量を算出
- 分布をみると、いずれの世代においても、また、現在、過去のいずれも、総じて右に裾野が長い分布
= 極端にコミュニケーション量が多い者は少数派
⇔ ゆとり、団塊Jr. ではコミュニケーション量僅少の者も少なくない



■ 社会的孤立リスク

- コミュニケーション量1、10、20、30を基準にリスクレベルを5分割
※ コミュニケーション量が少ない層ほど社会的孤立のリスクが高いと考えられるため
- 現在、過去ともゆとり、団塊Jr.は「レベル5」、「レベル4」が高い
= 団塊、75+世代より孤立リスクが高い可能性



II. 考察① 社会的孤立リスクの測定

■ 各世代における社会的孤立リスクのレベルが高い者の属性的特徴 (リスクレベル5の出現率)

● ゆとり世代

- 男性で高く、女性を10ポイント以上上回る。
未既婚別では未婚で高く、世帯類型別では親同居世帯、単身世帯の順に高い。また、本人職業別ではパート・アルバイト、無職（専業主婦を含む）、自営業で2割前後と高い

● 団塊Jr. 世代

- 男性で高く、女性を10ポイント以上上回る。
未既婚別では未婚で高く、世帯類型別では単身世帯、親同居世帯の順に高い。また、本人職業別では非正規被用者で2割を超えて高く、無職（専業主婦を含む）も次いで高い

● 団塊世代

- 男性で高く、未婚、既婚（離別）で高い。
世帯類型別では単身世帯で高い

● 75+世代

- 性別による差はなく、既婚（死別）、単身世帯で高い。

	ゆとり世代		団塊Jr. 世代		団塊世代		75+ 世代	
	N	リスクレベル5	N	リスクレベル5	N	リスクレベル5	N	リスクレベル5
全体	1647	16.0	1889	14.4	1862	5.5	1105	5.0
未婚	1337	18.8	633	23.9	69	13.0	13	23.1
既婚（配偶者あり）	299	4.0	1126	9.3	1542	4.2	920	3.8
既婚（離別）	11	9.1	122	13.1	129	13.2	28	7.1
既婚（死別）	—	—	8	0.0	122	9.0	144	10.4
男性計	727	25.7	953	21.0	964	6.4	799	5.1
未婚	682	26.2	427	29.5	30	16.7	3	33.3
既婚（配偶者あり）	42	16.7	473	13.5	853	4.9	743	4.3
既婚（離別）	3	33.3	50	20.0	54	14.8	13	15.4
既婚（死別）	—	—	3	0.0	27	25.9	40	15.0
女性計	920	8.4	936	7.7	898	4.5	306	4.6
未婚	655	11.0	206	12.1	39	10.3	10	20.0
既婚（配偶者あり）	257	1.9	653	6.3	689	3.3	177	1.7
既婚（離別）	8	0.0	72	8.3	75	12.0	15	0.0
既婚（死別）	—	—	5	0.0	95	4.2	104	8.7

	ゆとり世代		団塊Jr. 世代		団塊世代		75+ 世代	
	N	リスクレベル5	N	リスクレベル5	N	リスクレベル5	N	リスクレベル5
全体	1647	16.0	1889	14.4	1862	5.5	1105	5.0
単身世帯	367	16.1	279	22.6	213	11.7	108	12.0
夫婦のみ世帯	96	4.1	246	6.9	888	3.4	649	3.1
夫婦と子世帯	164	3.0	736	9.6	450	6.2	224	7.1
親同居世帯	934	20.3	603	19.1	173	5.2	13	0.0
三世帯世帯	84	7.1	25	24.0	138	7.2	111	5.4

	ゆとり世代		団塊Jr. 世代		団塊世代		75+ 世代	
	N	リスクレベル5	N	リスクレベル5	N	リスクレベル5	N	リスクレベル5
全体	1647	16.0	1889	14.4	1862	5.5	1105	5.0
正規被用者（民間）	720	12.4	790	13.8	184	9.2	—	—
非正規被用者	123	14.6	129	21.7	87	5.7	—	—
公務員	21	14.3	7	14.3	1	0.0	—	—
自営業	45	17.8	208	13.5	260	3.5	—	—
パート・アルバイト	324	22.2	270	10.0	211	5.2	2	0.0
無職（専業主婦含む）	398	18.1	473	16.1	1068	5.1	1055	5.0
その他	16	12.5	12	25.0	51	9.8	48	4.2

II. 考察① 社会的孤立リスクの評価指標の開発



- 高齢期の社会的孤立リスクの評価指標の開発(1)
 - 75+世代の社会的孤立リスクを対象として、以下の2種類について、分析により評価指標となりうる変数を選択
 - a. 外部から観察可能な項目のみ、
 - b. 当事者本人のみ評価可能な項目
 - 外部者による客観評価指標
 - 下記の項目への該当者では相対的に孤立リスクが高い
 - ◆ 属性・健康状態
 - » 未婚者、男性、離死別の経験者
 - » IADLの程度が低い者
 - ◆ 地理的環境
 - » 自宅からかかりつけの病院・診療所までの距離が離れている者
 - » 買い物・通院などの交通手段が自転車であり、最寄り駅・バス停までの距離が離れている者
- ⇔ 判別の精度は高くないものの、漏れなく発見する上では、上記項目の該当者には注意が必要

II. 考察① 社会的孤立リスクの評価指標の開発

■ 高齢期の社会的孤立リスクの評価指標の開発(2)

● 当事者本人による自己評価指標

■ 65歳ごろの人間関係の状況や 離死別、家族や人間関係に関する 価値意識へのあてはまりの程度に より、孤立リスクが高いグループに 該当する確率を判定可能

- ◆ 65歳ごろの人間関係数
- ◆ 65歳ごろの人間関係の種類数
- ◆ 離死別
- ◆ 「自分がよい／面白いと思ったことを誰かに否定されるのは耐えられない」
- ◆ 「子どものいる夫婦は、自分たちのことよりも、子どものことを第一に考えるべきだ」

⇨ サンプルの不足から判別不能となる部分もあることから、追加調査などにより、さらなる精緻化をはかっていく必要がある

当事者本人による自己評価指標

65歳ごろの人間関係数	65歳ごろの人間関係の種類数	離死別	「自分がよい／面白いと思ったことを誰かに否定されるのは耐えられない」	「子どものいる夫婦は、自分たちのことよりも、子どものことを第一に考えるべきだ」	リスク高グループへの該当／非該当		
5人未満	0種類	—	—	—	該当		
		1種類	離死別	あてはまる	—	該当	
	1種類	離死別	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	あてはまる	?	
					どちらかといえばあてはまる	非該当	
					どちらともいえない	該当 (確率低)	
					あてはまらない	?	
		どちらともいえない	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	あてはまる	非該当
						どちらかといえばあてはまる	該当 (確率低)
						どちらともいえない	該当
						あてはまらない	該当
						あてはまる	?
						どちらかといえばあてはまる	非該当
どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない	あてはまらない	あてはまらない	どちらともいえない	該当 (確率低)		
				あてはまらない	?		
1種類	離死別以外	あてはまる	あてはまる	—	?		
				あてはまる	?		
	どちらかといえばあてはまる	あてはまる	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	あてはまる	非該当	
					どちらともいえない	?	
					どちらかといえばあてはまらない	?	
					あてはまらない	?	
	どちらともいえない	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	あてはまる	非該当	
					どちらかといえばあてはまる	非該当	
					どちらともいえない	該当 (確率低)	
					あてはまらない	?	
どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない	あてはまらない	あてはまらない	—	非該当		
				あてはまらない	?		
あてはまらない	あてはまらない	あてはまらない	あてはまらない	あてはまる・どちらかといえばあてはまる	非該当		
				どちらともいえない	?		
2種類以上	—	—	—	—	非該当		
					5人以上	—	—

※表中の「—」は回答状況に関わらず「該当」または「非該当」となることが確定するもの
該当／非該当欄の「？」は今回調査の結果では対象者がいないため判別不能となっているもの

II. 考察② コミュニケーションに関する価値観の世代間比較 による孤立予防効果の考察



■ 分析の背景・仮説

- 孤立とはコミュニケーションが絶たれた状況のこと。コミュニケーションに関する価値観を把握することで、孤立予防策検討の一助となるのではないか。
- 近年の社会環境の変化により、コミュニケーションの価値観には世代間の違いがあるのではないか。

■ 情報通信技術の進化

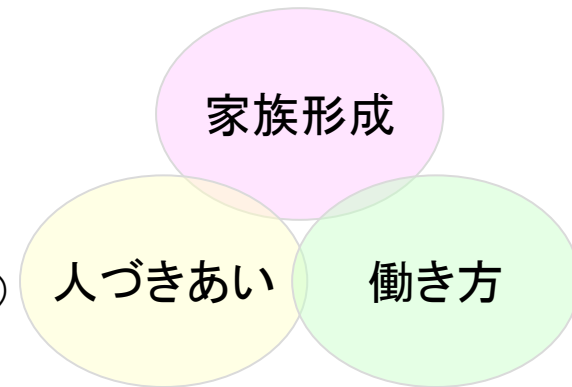
- ◆ ネット・スマホの普及拡大
⇒ 人づきあい(コミュニケーション)手段の多様化

■ 景気低迷による働き方の変化

- ◆ 非正規雇用者の増加、終身雇用・年功序列制の崩れ
⇒ 働き方の変化(勤め先への帰属意識の希薄化等)

■ 女性の社会進出

- ◆ 男女の役割分担意識の弱まり ⇒ 家族形成意識の変化



■ 分析の方針

- コミュニケーションとして、「家族形成」「人づきあい」「働き方」に注目。
- **ゆとり世代、団塊ジュニア世代、団塊世代、75+世代**の四世代のコミュニケーションに関する価値観の違いを把握し、孤立予防策を考察。

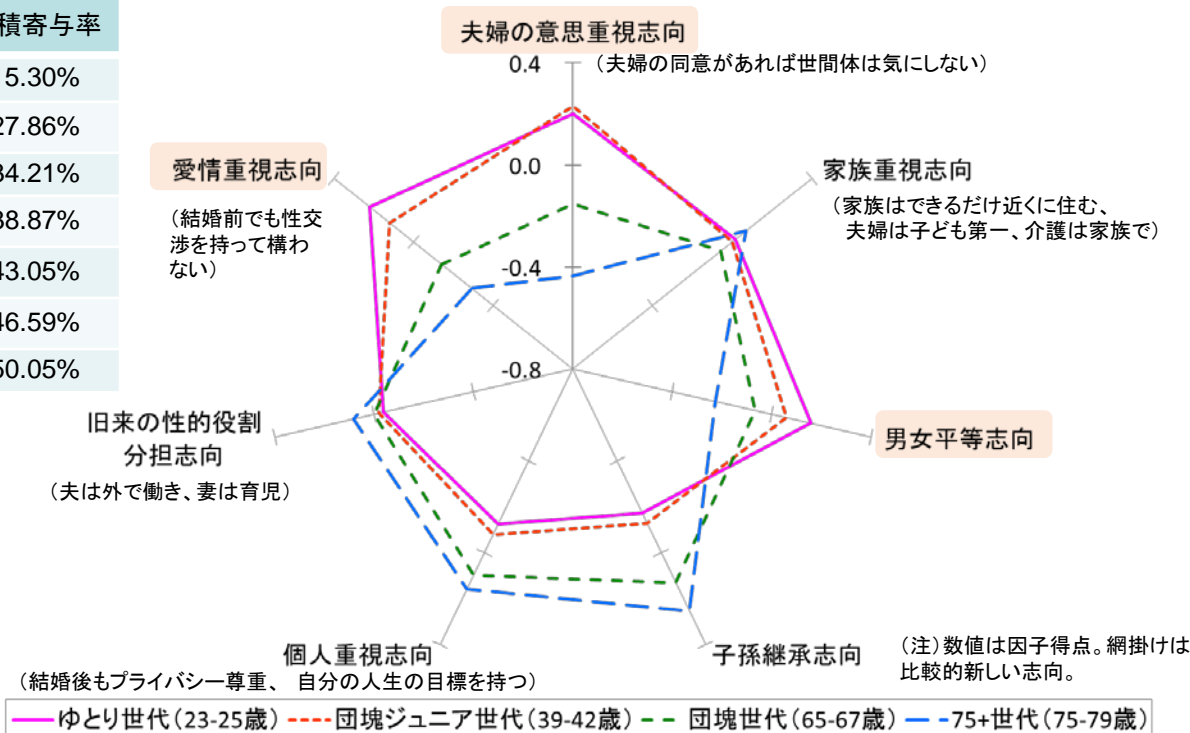
II. 考察② 家族形成に関する価値観

- 家族形成に関する価値観には、7つの志向が存在。
- 「家族重視」志向は世代によらず同様に強い。
- 「夫婦の意思重視」・「愛情重視」志向などの比較的新しい志向は若年層ほど、「子孫継承」・「旧来の性的役割分担」志向などの伝統的な志向は高齢層ほど強い傾向。

家族形成に関する価値観の因子分析結果

	固有値	累積寄与率
①夫婦の意思重視志向	4.591	15.30%
②家族重視志向	3.767	27.86%
③男女平等志向	1.906	34.21%
④子孫継承志向	1.397	38.87%
⑤個人重視志向	1.254	43.05%
⑥旧来の性的役割分担志向	1.063	46.59%
⑦愛情重視志向	1.038	50.05%

(注)最尤法、バリマックス回転



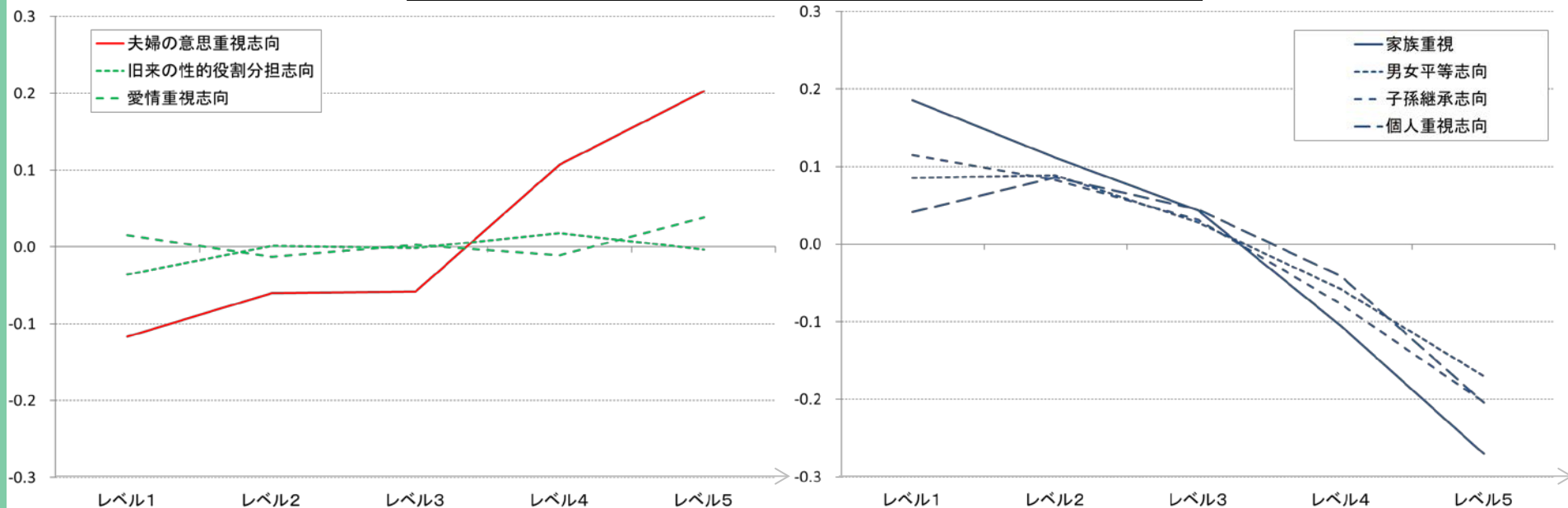
結婚や家事・育児等に関する30の考え方をあげ、5段階尺度で尋ねて得たデータに因子分析を行い、価値観を構成する要因を分析。

II. 考察② 家族形成に関する価値観と孤立リスクレベルの関係



- 「夫婦の意志重視」志向は、孤立リスクが高い人ほど強く、孤立リスクを高める可能性がある（ただし、75+世代では孤立リスクと無関係）。
 - 前頁より、「夫婦の意志重視」志向は若年層で強い。
- 「家族重視」・「男女平等」・「子孫継承」・「個人重視」志向は、孤立リスクが低い人ほど強く、孤立リスクを低減する可能性がある。
 - 前頁より、「家族重視」志向は全世代で同程度。「男女平等」志向は高年齢層ほど弱い。「子孫継承」志向は若年層ほど弱い。「個人重視」志向は若年層ほど弱い。

孤立リスクレベル別にみた家族形成に関する志向の因子得点



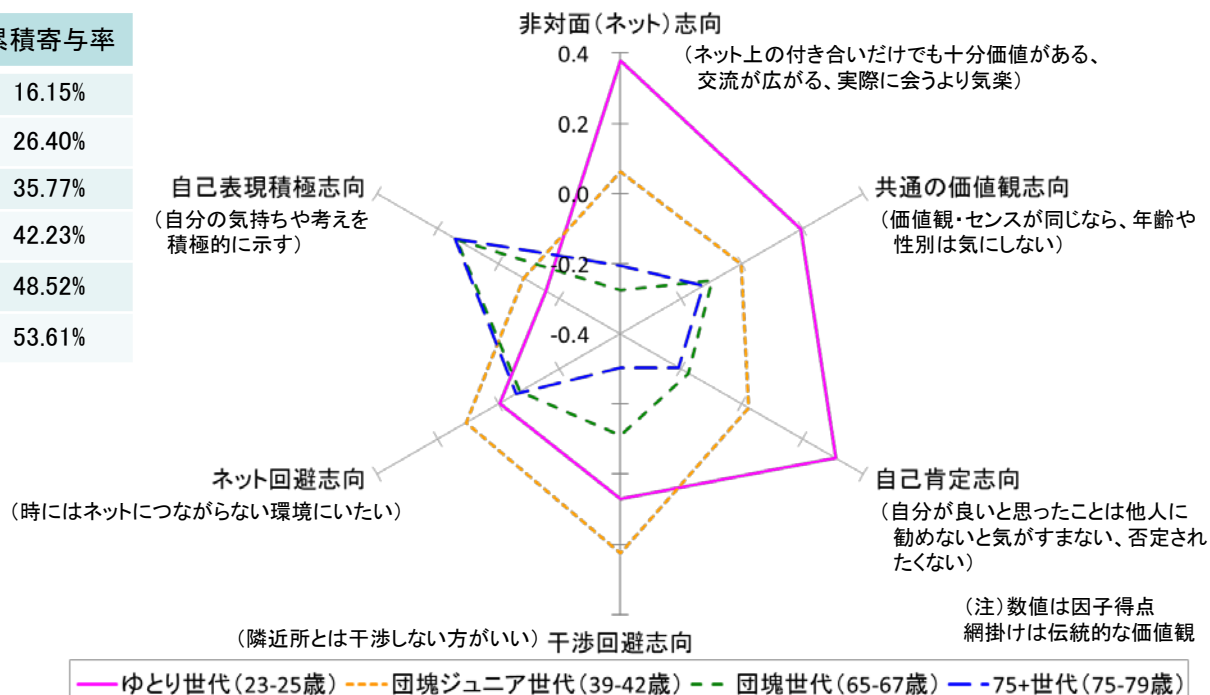
II. 考察② 人づきあいに関する価値観

- 人づきあいに関する価値観には、6つの志向が存在。
- 「非対面(ネット)」志向、「共通の価値観」志向、「自己肯定」志向は若年層ほど強い。
(←デジタル・ネイティブ世代の特徴、ゆとり教育による個性尊重教育の影響か。)
- 「干渉回避」志向や「ネット回避志向」は、団塊ジュニア世代で強い。
- 「自己表現積極」志向は、高齢層ほど強い。

人づきあいに関する価値観の因子分析結果

	固有値	累積寄与率
①非対面(ネット)志向	3.553	16.15%
②共通の価値観志向	2.255	26.40%
③自己肯定志向	2.061	35.77%
④干渉回避志向	1.420	42.23%
⑤ネット回避志向	1.383	48.52%
⑥自己表現積極志向	1.121	53.61%

(注)最尤法、バリマックス回転



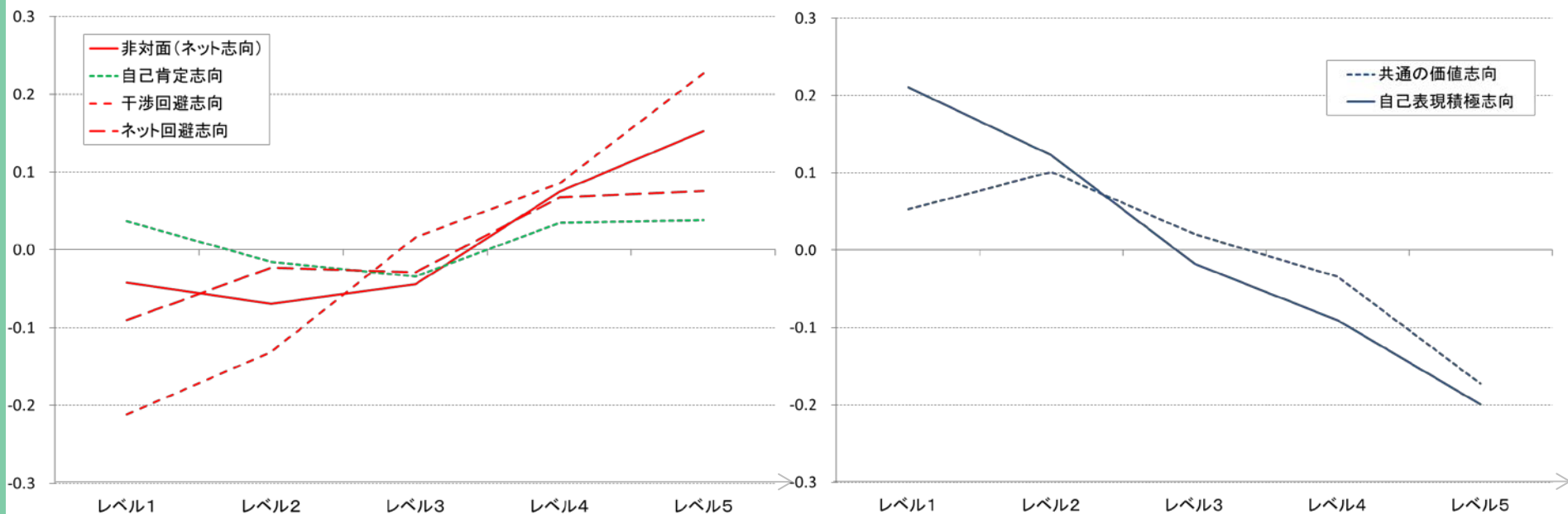
人づきあいに関する22の考え方をあげ、5段階尺度で尋ねて得たデータに因子分析を行い、価値観を構成する要因を分析。

II. 考察② 人づきあいに関する価値観と孤立リスクレベルの関係



- 「非対面(ネット)」志向は、孤立リスクが高い人ほど強く、孤立リスクを高める可能性がある。ただし、ゆとり世代では孤立リスクによらず強く、高年齢層では孤立リスクによらず低い。孤立リスクと比例するのは、団塊ジュニア世代のみ。
 - 前頁より、「非対面(ネット)」志向は、若年層ほど強い。
- 「干渉回避」志向は、孤立リスクが高い人ほど強く、孤立リスクを高める可能性がある。
 - 前頁より、「干渉回避」志向は団塊ジュニア世代で強い。
- 「自己表現積極」・「共通の価値観」志向は、孤立リスクが低い人ほど強く、孤立リスクを低減する可能性がある。
 - 前頁より、「自己表現積極」志向は若年層で弱い。「共通の価値観」志向は高年齢層ほど弱い。

孤立リスクレベル別にみた人づきあいに関する志向の因子得点



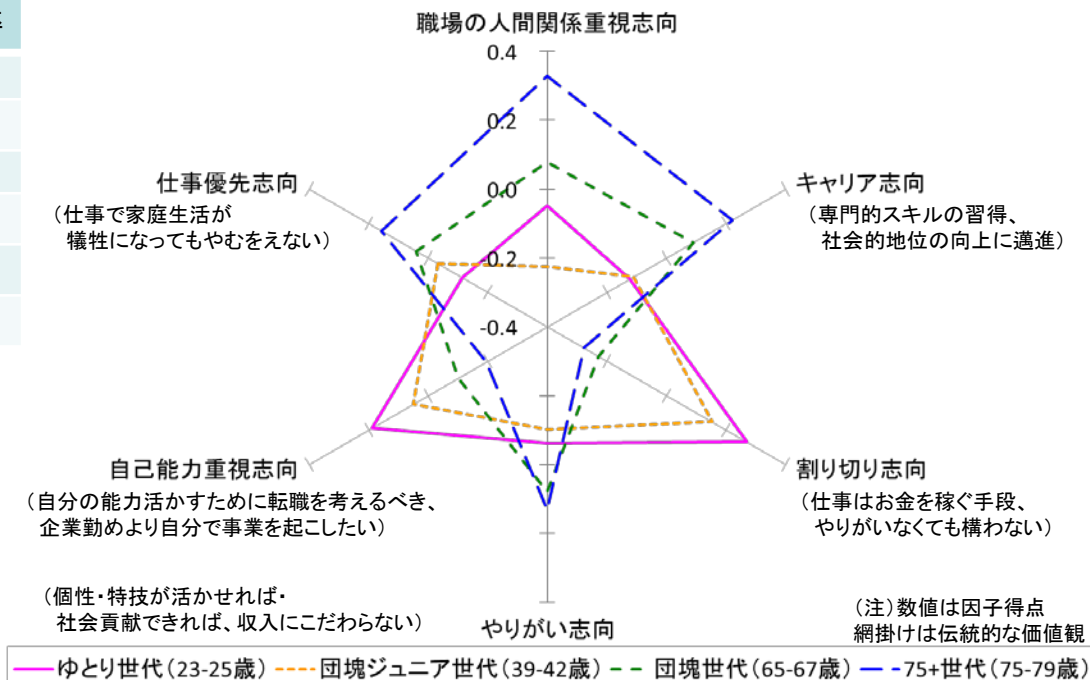
II. 考察② 働き方に関する価値観

- 働き方に関する価値観には、6つの志向が存在。
- 「割り切り」・「自己能力重視」志向は、若年層ほど強い。(←厳しい就労環境から企業への帰属意識が希薄化する一方、能力は活かしたい...ということか。)
- 「職場の人間関係重視」志向や「キャリア」志向、「仕事優先」志向は、高齢層ほど強い。(←仕事第一主義の影響か。)

働き方に関する価値観の因子分析結果

	固有値	累積寄与率
①職場の人間関係重視志向	3.658	14.07%
②キャリア志向	2.413	23.35%
③割り切り志向	1.954	30.87%
④やりがい志向	1.653	37.22%
⑤自己能力重視志向	1.304	42.24%
⑥仕事優先志向	1.107	46.50%

(注)最尤法、バリマックス回転



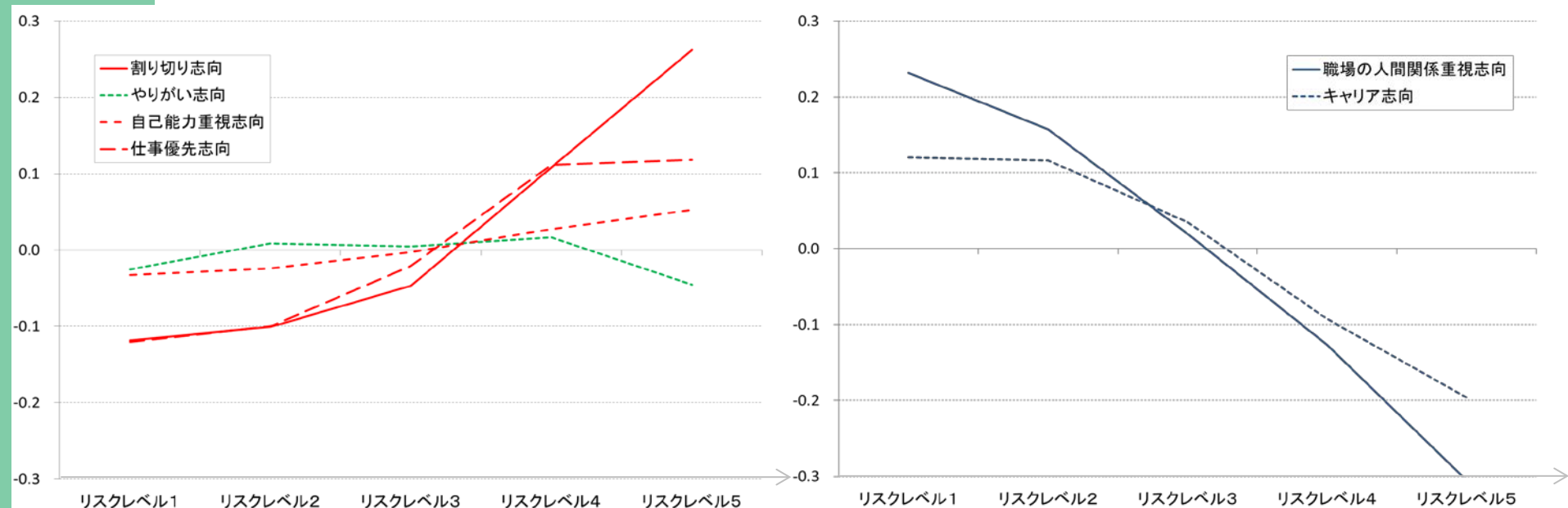
働き方に関する26の考え方をあげ、5段階尺度で尋ねて得たデータに因子分析を行い、価値観を構成する要因を分析。

II. 考察② 働き方に関する価値観と孤立リスクレベルの関係



- 「割り切り」・「仕事優先」志向は、孤立リスクが高い人ほど強く、孤立リスクを高める可能性。
 - 前頁より、「割り切り」志向は若年層ほど強い。「仕事優先」志向は高年齢層ほど強い。
- 「職場の人間関係重視」志向・「キャリア」志向は、孤立リスクが低い人ほど強く、孤立リスクを低減する可能性。特に、前者は、ゆとり世代、後者は、ゆとり・団塊ジュニア世代で、孤立リスクによる差が大きい。
 - 前頁より、「職場の人間関係重視」志向や「キャリア」志向は若年層ほど弱い。

孤立リスクレベル別にみた働き方に関する志向の因子得点



II. 考察② 孤立予防効果の考察



- 家族形成に関する価値観から
 - 全ての世代で、孤立リスクを低減する「家族重視」志向は同程度であり、**家族を大切にすることは孤立予防に効果的。**
 - **若年層では、孤立リスクを低減する「子孫継承」志向が弱いため、「結婚をして子を産み育てていく」という意識を明確にすることは効果的。**
 - **若年層では、孤立リスクを高める「夫婦の意志重視」志向が強いため、家族や友人など周囲の意見を省みることも効果的。**
- 人づきあいに関する価値観から
 - ゆとり世代(デジタル・ネイティブ)では、ネットを介したコミュニケーションは一般的なもの。必ずしも「非対面(ネット)」志向が孤立を招くわけではない。ただし、**団塊ジュニア世代(デジタル・イミグランド)では、「非対面(ネット)」志向が孤立を招く傾向が強いため、意識的にネット利用時間を減らす、リアルのつき合いに顔を出すなどの工夫をすると効果的。**
 - **団塊ジュニア世代では、孤立リスクを高める「干渉回避」志向も強いため、例えば、面倒でも、近隣の人と挨拶だけはするなどの心がけが効果的。**
 - **高齢層では、孤立リスクを低減する「共通の価値観」志向が弱いため、相手の属性によらず輪を広げる努力を意識的にすると効果的。**
- 働き方に関する価値観から
 - **若年層では、孤立リスクを高める「割り切り」志向が強いため、周囲とのコミュニケーションを意識する、仕事にやりがいを見出すなどの工夫をすると効果的。**
 - **高年齢層では、孤立リスクを高める「仕事優先」志向が強いため、家庭生活や友人付き合いを振り返るなどの意識を高めると効果的。**
 - **若年層では、孤立リスクを低減する「職場のコミュニケーション重視」志向や「キャリア」志向が弱いため、職場のつきあいを大切にす、専門的スキルの習得や社会的地位向上に向けてキャリアプランを練るなどの意識を高めると良い。**

II. 考察③ 高齢期の生活環境と孤立リスクを踏まえた まちづくりのあり方～移動時間距離に着目して



- 健康状態がよくない人では、自宅から、生活する上で必要な施設への移動距離や近隣世帯との距離があることが、コミュニケーション量にマイナスの影響を与える。
- 健康状態がよくないことから移動に制約が生じて、移動時間距離があるほど人とのコミュニケーション機会が減り、孤立リスクを高める。



- アンケート結果から主要施設までの移動時間距離、外出頻度、主な移動手段に着目して高齢層の傾向を分析
- 主要施設までの移動時間距離が長く、孤立リスクレベルが高い高齢層の生活環境をGIS(地理情報システム)を用いて詳しく分析

II. 考察③ 移動時間距離について

- アンケートの回答を基に日頃、自宅からよく行く場所までの距離と、現在の住まいと近隣の世帯との位置関係を点数化
- 点数の総和が大きいほど移動時間距離がある生活環境と捉える

自宅からよく行く場所までの距離

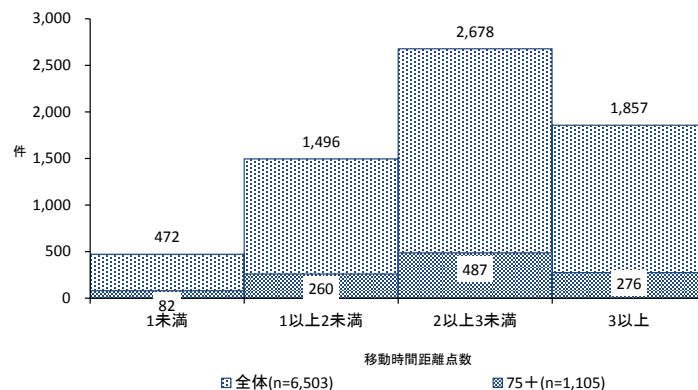
(最寄りの駅やバス停、よく利用する店舗、かかりつけの病院・診療所)

・ 徒歩 5 分以内	0点
・ 徒歩 5 分～10分以内	0.5点
・ 徒歩10分超	1点

現在の住まいと近隣の世帯との位置関係

・ 自宅の隣や向かいに、世帯が暮らす住居がある	0点
・ 隣や向かいにはないが、同じ通り、同じフロアに、世帯が暮らす住居がある	0.1点
・ 隣や向かい、同じ通り、同じフロアにはないが、同じ区画、同じ棟内に、世帯が暮らす住居がある	0.15点
・ 最も近くに住む世帯の住居まで、徒歩で5分未満	0.25点
・ 最も近くに住む世帯の住居まで、徒歩で5分以上	0.5点

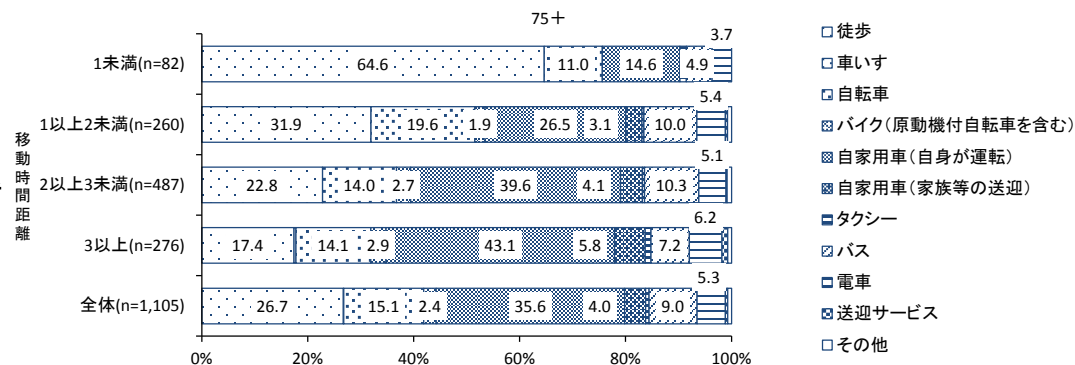
移動時間距離点数分布



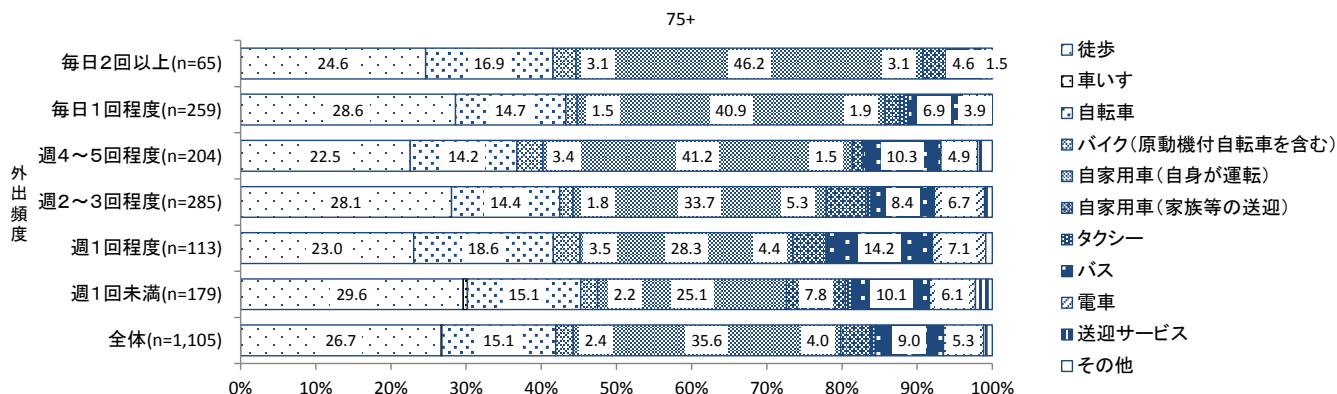
点数が大きいほど移動時間距離がある生活環境

II. 考察③ 移動時間距離からみた生活環境

- 移動時間距離が長い生活環境に居住する高齢層ほど、自家用車を運転して移動している人が多い。



- 外出頻度が高い高齢層ほど、自ら運転する自家用車を主な移動手段とする割合が高い。
- 外出頻度が低い高齢層は、徒歩の他、自転車、家族等の送迎、送迎サービスの割合が比較的高い。



II. 考察③ 移動時間距離からみた生活環境



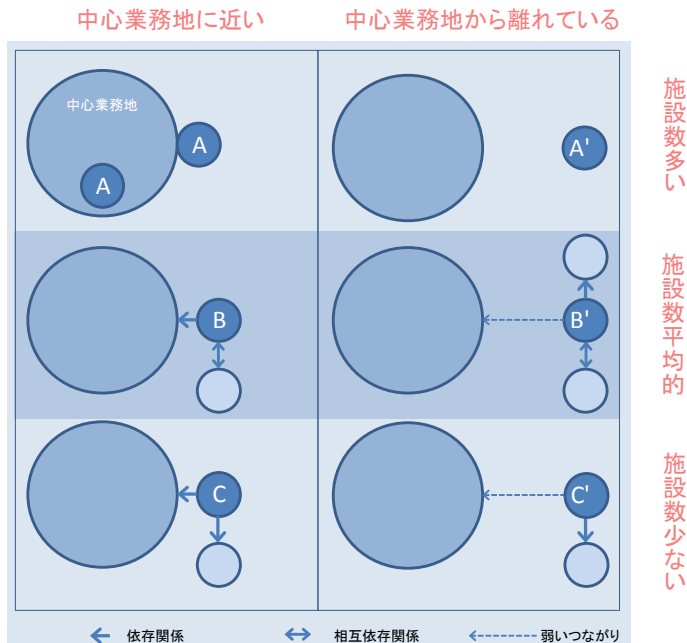
- 移動時間距離が長い生活環境に居住する高齢層の生活は、自ら運転する自家用車によって支えられている。
- 自ら自家用車を運転できなくなると、移動範囲が限定的な徒歩や、制約の多い他の移動手段に頼ることになり、外出頻度が低くなる。
- その結果、人との直接的なコミュニケーション機会が減り、孤立リスクが高まる。
- 移動時間距離が長い生活環境にいる高齢層ほど、その影響を受けやすい。

II. 考察③ 孤立リスクレベルが高い高齢層の生活環境

- 75+世代、移動時間距離3以上、リスクレベル5のサンプル20件について、GISを用いて徒歩圏における主な施設立地の状況と中心業務地からの距離によって6つの地域に類型化して、生活環境を詳しく分析。

■ 地域類型A、A'

- 施設は多く立地するが、その中でも外出頻度が低いサンプルがある。
- 施設は多くても、加齢や健康状態により自身の徒歩圏域が狭くなれば、自立した生活を送ることができず、孤立リスクを高める可能性がある生活環境

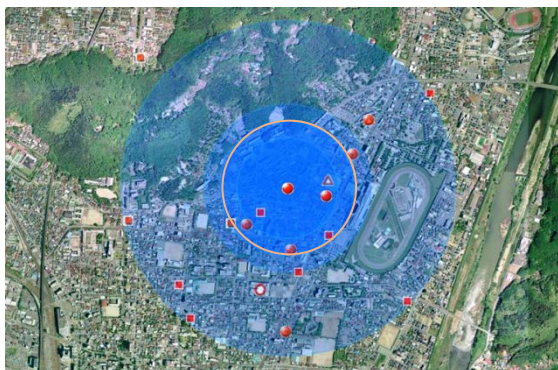


■ 地域類型B、B'、C、C'

- 徒歩圏内の施設立地は限定的、A、A'への移動が必要。
- 外出頻度が低いサンプルでは、徒歩や他の移動手段を用いている。
- 自家用車が運転できなければ、外出頻度を低くし、孤立リスクを高める可能性がある生活環境

II. 考察③ 施設立地の状況

A



A'



B



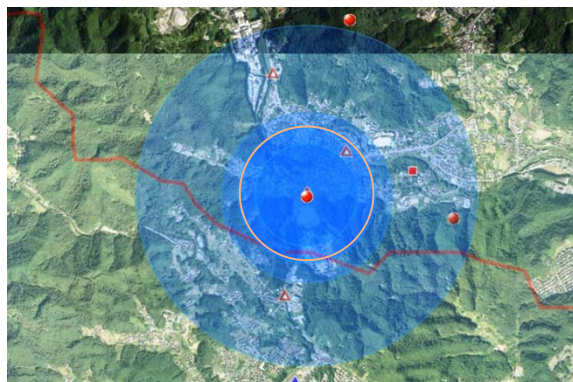
B'



C



C'



- ・圏域を示した円は内側から半径 300m、400m(橙)、500m、1,000m。
- ・▲ 駅
- ・△ バス停
- ・● 病院・診療所
- ・■ スーパーマーケット・コンビニエンスストア
- ・○ 市役所、都道府県庁

「地理院地図」
国土地理院

II. 考察③ 孤立リスクを踏まえた今後のまちづくり



- コミュニケーションを促すためのまちづくり
 - 人々のコミュニケーションを促進し、そこで暮らすことに魅力や効能を感じるまちづくりの推進
- 徒歩移動により自立的に生活できる環境を有していないエリア(B,B',C)
 - ◆ 空地や空き家を活用して、居住者同士によるコミュニティ活動の場、高齢層の介護予防の場として活用できるような空間利用による、居住者同士のコミュニケーションを持続させる仕組みづくり
- 中山間地域の集落地(C')
 - ◆ 自家用車依存を低減させる公共交通の導入、公共交通の起点に生活を支える物やサービスの集約化と、そこで人と触れ合える場所の整備による、住み続けられる仕組みの導入
- 多くの人が住み替える可能性がある地域(A,A')
 - ◆ 住み替えの受け皿として、居住者同士のコミュニケーションを誘発する住宅の導入
 - ◆ 多様なライフスタイルに応じた、柔軟な公共空間利用

II. 考察④ 社会的孤立問題に対する捉え方

①「高齢期の社会的孤立問題」に対する受け止め方

社会的に問題がある	4割(39.8%)
本人や家族が解決すべき問題	3割(31.0%)
本人が選択した生活であり問題ではない	2割(23.1%)

②「社会的孤立」の原因の捉え方(複数回答)

(%)

社会的孤立の原因	とてもそう思う
	そう思う
	計
地域の中での人と人のつながりが希薄化した 地域社会の変化 の結果	61.2
本人の 経済的な問題(貧困) が背景にある	55.6
老親や配偶者の 介護の問題 が背景にある	52.3
あくまで 本人の性格 の問題	43.0
高齢者の外出を促すきっかけを提供できない 地域社会の取組み が問題	40.5
地域とのつながりを持たずに暮らしてきた 本人の過去の生活 が問題	38.3
自宅で独りでも不自由なく暮らせる 豊かさ がもたらした結果	34.4

II. 考察④ ライフデザインと将来の孤立不安

■将来の生活設計を考えている人ほど、「将来、孤立する可能性は低い」と思っている

			孤立の可能性						合計
			とても 思う	そう 思う	どちら とも いえない	そうは 思わ ない	まったく そうは 思わ ない	わか らな い	
男性	生活設計の有無	具体的に立てている	17	41	59	41	14	3	175
			9.7%	23.4%	33.7%	23.4%	8.0%	1.7%	100.0%
		大雑把には立てている	103	366	487	233	51	29	1269
			8.1%	28.8%	38.4%	18.4%	4.0%	2.3%	100.0%
		今は考えていない（そのうち考えるつもり）	137	317	353	98	15	30	950
		14.4%	33.4%	37.2%	10.3%	1.6%	3.2%	100.0%	
	特に計画を立てるつもりはない（成り行きに任せる）	167	298	393	123	21	47	1049	
		15.9%	28.4%	37.5%	11.7%	2.0%	4.5%	100.0%	
	合計	424	1022	1292	495	101	109	3443	
		12.3%	29.7%	37.5%	14.4%	2.9%	3.2%	100.0%	
女性	生活設計の有無	具体的に立てている	18	45	51	35	16	1	166
			10.8%	27.1%	30.7%	21.1%	9.6%	0.6%	100.0%
		大雑把には立てている	84	303	383	270	70	18	1128
			7.4%	26.9%	34.0%	23.9%	6.2%	1.6%	100.0%
		今は考えていない（そのうち考えるつもり）	140	366	358	134	41	37	1076
		13.0%	34.0%	33.3%	12.5%	3.8%	3.4%	100.0%	
	特に計画を立てるつもりはない（成り行きに任せる）	95	193	232	110	35	25	690	
		13.8%	28.0%	33.6%	15.9%	5.1%	3.6%	100.0%	
	合計	337	907	1024	549	162	81	3060	
		11.0%	29.6%	33.5%	17.9%	5.3%	2.6%	100.0%	
合計	生活設計の有無	具体的に立てている	35	86	110	76	30	4	341
			10.3%	25.2%	32.3%	22.3%	8.8%	1.2%	100.0%
		大雑把には立てている	187	669	870	503	121	47	2397
			7.8%	27.9%	36.3%	21.0%	5.0%	2.0%	100.0%
		今は考えていない（そのうち考えるつもり）	277	683	711	232	56	67	2026
		13.7%	33.7%	35.1%	11.5%	2.8%	3.3%	100.0%	
	特に計画を立てるつもりはない（成り行きに任せる）	262	491	625	233	56	72	1739	
		15.1%	28.2%	35.9%	13.4%	3.2%	4.1%	100.0%	
	合計	761	1929	2316	1044	263	190	6503	
		11.7%	29.7%	35.6%	16.1%	4.0%	2.9%	100.0%	

III . 社会的孤立予防視点のまとめ

			孤立リスクとの関係		予防視点(策)		
			高める要因	弱める要因	個人	地域・社会	
家族・人間関係	属性・状態	性別・婚姻状態	男性 未婚、配偶者と離死別	(再婚、内縁者の確保)	高齢期までの幅広い人間関係の構築	社会的孤立リスク評価指標 (試案)の活用 ※人間関係と価値観の設問より	
		人間関係(量)	65歳時5人未満	(65歳時5人以上)			
		人間関係(種類)	65歳時2つ未満	(65歳時2つ以上)			
	価値観・志向	家族形成	家族形成	夫婦の意思重視志向	家族重視・男女平等	自己分析と意識・行動の改善	ライフデザイン教育・啓発の充実
			人つきあい	干渉回避志向	自己表現志向		
		働き方	人つきあい	非対面(ネット)志向*	共通の価値観志向		
			働き方	割り切り志向	職場の人間関係重視志向		
	人生設計(意欲)	なし	目標設定と具体計画作成	後半人生の人生設計の実施			
健康・住環境	健康問題なし	健康問題なし	公共交通機関へのアクセス悪い	虚弱生活期における人とのつながり確保を意識した地域・住居選択(住み替え等)	地域特性に応じた、人々のコミュニケーションを促進する住まいづくり、まちづくりの推進		
		健康問題なし	車依存は要注意				
		健康問題なし	移動時間距離が長い				
	健康問題あり	健康問題あり	近隣世帯との距離が遠い				
健康問題あり		移動時間距離が長い					

* 世代により傾向が異なり、ゆとり世代ではリスクレベルによらず強く、高齢層ではリスクレベルによらず低い。団塊ジュニア世代ではリスクレベルと比例して強くなる。